

ねぎ

黒斑病・葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）

発生の動向

- 1 令和2年の発生面積率は68.3%（平年54.9%）であり、平年より高かった（図1）。
- 2 時期別では、7月上旬から発生が見られ、8月上旬以降は発生圃場率が平年より高くなった（図2）。
- 3 10月上旬の調査では、すべての圃場で黄色斑紋病斑が確認された。
- 4 葉枯病菌は、べと病やさび病、黒斑病の病斑上や、ネギハモグリバエの潜葉痕上に病斑を形成することがある（令和元年度および2年度防除技術情報参照）。

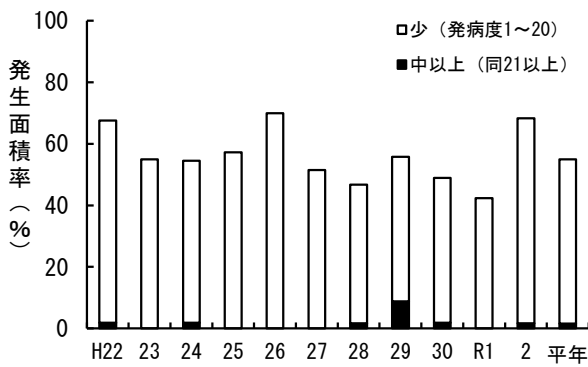


図1 黒斑病・葉枯病発生面積率の年次推移（年間評価）

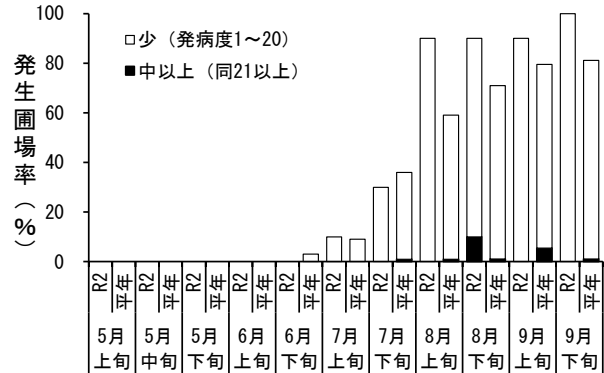


図2 巡回調査における黒斑病・葉枯病の時期別発生圃場率

防除対策

葉枯病の褐色斑点病斑（図3左）の発生を防ぐため、以下の点に注意した防除を実施する。

- 1 黒斑病・葉枯病の発生を抑制するため、他の病害虫を含めて薬剤防除を計画的に実施する。
- 2 8月下旬以降は葉枯病菌の感染が特に多くなるため、効果の高い薬剤を用いたローテーション散布を実施する。
- 3 生育後期に肥料切れ等で草勢が衰えると発生が助長されるので、肥培管理を徹底するとともに、収穫遅れにならないよう注意する。
- 4 病原菌は収穫残渣などで越冬して伝染源となるため、被害茎葉や被害株などは圃場外へ持ち出して処分する。



図3 葉枯病（左：褐色斑点病斑 右：黄色斑紋病斑（赤枠内））

ネギハモグリバエ

発生の動向

- 1 令和2年の発生面積率は78.9%（平年48.7%）であり、平年より高かった（図1）。
- 2 時期別では、5月下旬から発生が見られ、6月下旬に発生圃場率が急増し、9月下旬まで平年より高く推移した。また、被害程度の高い圃場は8月上旬に急増し、9月下旬まで平年より高く推移した（図2）。
- 3 被害程度の高い圃場の一部では、ネギハモグリバエB系統の発生が確認された（令和2年度特殊報第1号、令和2年度防除技術情報参照）。
- 4 前年の多発圃場では越冬密度が高いと考えられる。
- 5 例年、6月上旬から被害が増加するが、春が高温で推移すると早期に被害が発生する可能性がある。

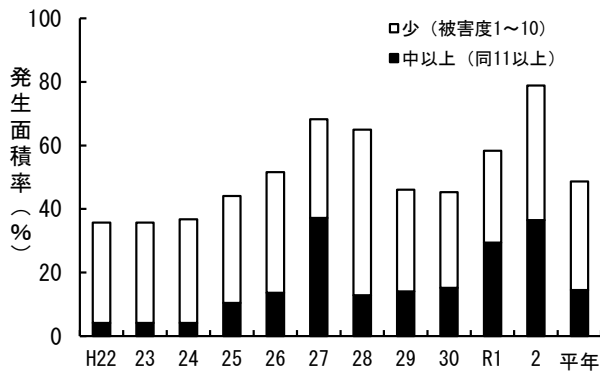


図1 ネギハモグリバエの発生面積率の年次推移
(年間評価)

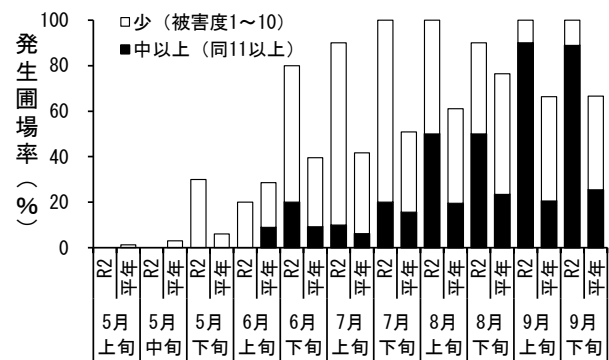


図2 巡回調査におけるネギハモグリバエの
時期別発生圃場率

防除対策

- 1 定植の時期を問わず、かん注処理剤を施用してから定植する。
- 2 多発すると防除が困難となるため、ネギアザミウマとの同時防除を心掛け、発生初期から防除間隔が空かないように防除する。
- 3 薬剤抵抗性の発達を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- 4 被害葉や収穫残渣は圃場内に放置せず、まとめて積み上げ、ビニールで被覆・密封するなど、太陽熱を利用して殺虫する。